

今から約100年前の20世紀初頭、欧州でモダニズム建築が始まった。第1次世界大戦が終った1920年代、戦間期と呼ばれる時期である。モダニズム建築は、19世紀までの様式建築とは異なり、合理的、機能的に建築を計画する手法であり、鉄、コンクリート、ガラスなどの工業生産による材料により構成される。その代表的な作品としてワルター・グロピウスによるバウハウス校舎（26年）やル・コルビュジエのサヴォア邸（31年）などがある。日本の建築界においても、いち早く若い

建築家たちがその動きを学び、自分たちの手法として取り入れた。堀口捨巳や山田守らが20年に立ち上げた「分離派建築会」はその一つである。

振り返ってみると、モダニズム建築は第1次世界大戦（19

建設 論評

モダニズム建築

14―18年）、ロシア革命（17年）、ドイツ革命（18―19年）、スペイン風邪（18―20年）、世界恐慌（30年）など、大きな社会的危機が発生した変革の時代に生まれ、育ったものである。わが国では関東大震災（23年）も発生し、その復旧・復興事業のため困窮を極めた時代である。厳しい社会情勢ではありながら、建築界では近代建築国際会議（28―57年）が開かれ、ニューヨークの近代美術館では近代建築展「インターナショナル・スタイル 1922年以後の建築」（32年）が企画されるなど、その後の建築界の流れを決定付ける活発な活動が展開された。

1920年から30年にかけて、わが国の若い建築家たちの中に、欧州を視察する者、留学する者が続いた。ある者は国や軍の出張として、ある者は巨額の私費を投じて、およそ1年もの時間を費やして渡航した。渡欧した年とその時の年齢を括弧書きの中に記載すると、渡航順に中村順平（20年、33歳）、薬師寺主計（21年、37歳）、石本喜久治（22年、28歳）、堀口捨巳（23年、28歳）、岸田日出刀（25年、26歳）、今井兼次（26年、31歳）、前川國男（28年、23歳）、坂倉準三（29年、28歳）、山田守（29年、35歳）、蔵田周忠（30年、35歳）、山脇巖・道子（30年、32歳・20歳）、吉田鉄郎（31年、37歳）となる。当時も建築専門誌を通して欧州の建築界の最新情報が得られていたが、同時代の建築家に直接会い、その作品を現地で視察する

ため、高い志を持った若き建築家たちが海を渡った。そして帰国後、日本の建築界の大きな流れを形成することに貢献した。100年前の世界の社会経済の状況は、現代社会が直面する状況、すなわちコロナ禍、ウクライナやガザの紛争、トランプ政権による経済的枠組みの見直しなどと類似する。100年前も現代も社会の大きな変革期にあり、建築界もその変化への対応が求められているのだろう。約100年前、若き建築家たちが当時の社会経済的課題に対応するためモダニズム建築を構想したように、今も大きな危機が迫っていることを認識し、現代社会が抱える社会の諸課題への対処策を考えることが急務である。

（誠）

